

## 「子ども文化」の創造における活動の構成方法

—第2学年生活科「秋を楽しもう」の実践を通して—

Organization of Children's Activities for Creating Their Own Culture in Life  
:through Practice of the Unit "Enjoying Autumn" in the Second Grade

馬野 範雄

(大阪教育大学教育学部附属平野小学校)

はじめに

生活科が1992年4月から実施された。この教科は、「低学年児童の発達特性に適合した教育活動ができる教科を設定する」「社会の変化に対応できる主体的な人格の形成を図る」などといった意図のもとに、子ども一人ひとりの『自立への基礎』を養うことをめざして誕生した。各地で研究授業が行われ、実践報告会も数多くもたれているが、具体的に「どんな目標に対して、どんな活動を行うのか」「そのために、どのような活動の場を構成するのか」といったことについてのコンセンサスはまだ得られていない。

私の勤務する大阪教育大学教育学部附属平野小学校では、子どもたちが自分の生活を見直しながら真に自己を発揮し、自らの手によって文化を創造していくことが重要であると考え、1988年より『子どもたち自らの手による文化の創造』というテーマで実践的な研究を進めてきた。<sup>1)</sup> 本小論では、1990年より本校において行った生活科実践研究をもとに、生活科学習の中核となる「主体的な活動の場」と「活動の交流の場」について、その構成方法を明らかにしたい。

### I 生活科と「子ども文化」

#### 1 生活科の特性

##### (1) 観察者から生活者へ

校庭で遊んでいる子どもが、偶然生き物を見つけ、教室に持ち帰って飼いはじめることがよくある。これまでの低学年の理科の学習では、生き物を捕まえ、飼うなかで生き物の形態や生活のしかたについて、客観的に調べていく活動を大切にしていた。つまり、子どもたちの生き物に対する見方・考え方を育て、観察者としての目を養っていくことに重点をおいていた。

さて、生活科が始まった教室にも、これまでと同じようにカミキリムシ・スズムシ・メダカ・キンギョなどさまざまな生き物を入れた虫かごや水槽が並んでいる。しかし、そこで話題になるのは、キンギョやスズムシの生態ではなく、えさやすみかといった育て方、

つまり、いっしょに生活している者としての生き物へのかかわり方なのである。

##### (2) 知ることから親しむことへ

これは、自然にかかわる内容だけではなく、社会にかかわる内容にもいえる。例えば、低学年社会科「郵便の仕事をする人々」では、これまで郵便局のしくみや工夫を知るために、郵便局の見学をしたり郵便ごっこをしたりしてきた。しかし生活科では、手紙で必要なことを伝えるとともに、人々と適切に対応できるようにするために、手紙づくりを行い、実際に郵便局に出しに行く活動を大切にしている。そして、郵便局で働いている人に値段や出し方を聞いたりして、手紙や郵便局に親しみがもてるようにしている。

このように生活科では、「観察者の育成から生活者の育成へ」「知ることから親しむことへ」と重点が移ってきたといえる。<sup>2) 3)</sup>

#### 2 「子ども文化」の創造

子どもたちは、日頃から自分たちの生活を楽しいものにするために、いろいろ工夫して遊んでいる。しかし、生活科における体験が契機となって、一層自分たちの遊びを工夫して、楽しい遊びを創りだしていくことができる。

2年「雨の日を楽しもう」の単元では、教室で楽しく遊ぶことができるおもちゃを作ることになった。いろいろな遊び道具の発想や具体的な計画を交流しながら、自分の作りたいものを、自分の作り方で作っていった。そして、すごろく・パチンコ・シルバニアファミリーの家・サーキットなど、様々なおもちゃを完成させ、雨の日には楽しく遊ぶことができた。

このように本校では、子どもたちが自分たちの生活を見直しながら、自分の生活をよりよくするために、「何を」「どのようにして」ということを、子どもが主体的に決定し、実行していくことが大切であると考えている。そして、一人ひとりがいきる主体者として環境に積極的に働きかけ、創りだされた子どもの考え方や・感じ方・行動のしかたを、『子ども文化』とら

えてきた。<sup>4)</sup>

## II 「子ども文化」を創りだす活動<sup>5)</sup>

### 1 主体的な活動の場の構成

子どもが主体的に活動を展開していくためには、「何を」「どのようにして」といった活動の内容や方法を、一人ひとりが自分の思いに向けて自由に工夫できることが必要である。教師に言われた通りにしている活動ではなく、試行錯誤を繰り返しつつも、自分の考えで活動を進めていってこそ、主体的な活動といえるのである。

#### (1) 主体的な活動に向けての読み取り

子どもの主体的な活動を保障するためには、子どもの実態をとらえておく必要がある。なぜなら、子どもの実態をとらえることなしには、子どもの活動への適切な援助ができないからである。

##### ① 子どもができることの読み取り

「さあ、自由にやりなさい」と言われ、すぐに活動を始め、やり通せる子どもは少ない。低学年の子どもにとって、一人でできることには限界がある。まず活動させてみることは大切であるが、能力的に不可能なことをしては、危険がともなったり、活動が停滞したりしてしまう。

そこで、子どもができそうなことをとらえておくのである。例えば、それまでの子どもの生活経験や学習経験を、紹介カードによって読み取り、直接子どもから聞き取っておくと、次の活動構成に役立てることができる。

##### ② 子どもがしたいことの読み取り

子どもが主体的に活動を始めるためには、その活動に対する興味・関心は不可欠である。「おもしろそうだ」「やってみたい」といった思いが、主体的に活動を推進していくのである。それだけに、「子どものしたいことは何か」という意欲の方向をとらえておく必要がある。

「何を」「どのようにして」やりたいのかを表した計画カードを活用すると、子どもの興味・関心の有無や意欲の方向をとらえるのに有効である。

#### (2) 主体的な活動への援助

このような子どもの実態把握にたって、子どもの主体的な活動を援助したいものである。一人ひとりの子どもの主体的な活動に対して、次の5つの観点から援助の内容を考えておくと、適切な援助を果たすことができる。

a. 「物」の援助…「～をしたい」「～でしたい」といった子どもの欲求に応えるだけの「物」について、その量や種類を想定し、できる範囲で準備しておく。

b. 「心情」への援助…子どもが活動につまずいたり、意欲や自信をなくしてしまったりした時に、必要に応じて認めたり励ましたりする。

c. 「技能」の援助…製作のしかた、植物や動物の植え方・飼い方のこつなど、子どもにとって困難だが活動上どうしても必要な技能について指導する。

d. 「空間」の援助…集会室・体育館・運動場・プールなど、教室以外の場所も、子どもの必要に応じて可能な限り保障する。

e. 「時間」の援助…週に3回の生活科というのではなく、活動内容によっては、3時間通しの週1回の生活科というように、時間を柔軟に運用する。

このような援助を図るときには、次のような配慮が必要である。

- 子どもの活動に応じて行う。
- 援助のタイミングに十分配慮する。
- 援助のしかたを工夫する。

### 2 活動の交流の場の構成

「子ども文化」を創造していくためには、一人ひとりの子どもの活動を大切にするだけでなく、子ども集団の中で、ものの見方や考え方、感じ方を交流することが大切である。なぜなら、友だちとの交流を図ることによって、友だちの多様な活動や活動に対する思いを知り、自分にとっての「よりよい生活のしかた」を見つけることができ、「子ども文化」が創造されていくからである。

#### (1) 活動の交流への読み取り

##### ① 活動の進捗の読み取り

学級全体で交流の場をもつためには、どの子どももある程度活動の進展があり、自分の活動を発表したり、友だちに興味をもって発表を聞けたりできるようになっている必要がある。そこで、交流の時期をみきわめるために、子どもの活動の進捗を読み取っておく。

##### ② 交流内容の読み取り

子どもは、それぞれの活動をすすめていく過程で様々な工夫をし、失敗や成功を繰り返している。そんな中で、他の子どもに認めてほしいことがあるのか、困っていることがあるのかなど、交流すべき内容を読み取っておく。

#### (2) 活動の交流への援助

このような観点からの読み取りを基にすると、価値ある交流の場を構成することができる。現在は次のような方法によって、活動の交流の活性化を図っている。

- a. ツアー方式…制作場所へ行って友だちの作品を見て、自分たちの活動内容やその時の思いを交流する。
- b. 展覧会方式…作品とその紹介文を掲示しておき、

# 「子ども文化」の創造における活動の構成方法

—第2学年生活科「秋を楽しもう」の実践を通して—

Organization of Children's Activities for Creating Their Own Culture in Life  
:through Practice of the Unit "Enjoying Autumn" in the Second Grade

馬野 範雄

(大阪教育大学教育学部附属平野小学校)

はじめに

生活科が1992年4月から実施された。この教科は、「低学年児童の発達特性に適合した教育活動ができる教科を設定する」「社会の変化に対応できる主体的な人格の形成を図る」などといった意図のもとに、子ども一人ひとりの『自立への基礎』を養うことをめざして誕生した。各地で研究授業が行われ、実践報告会も数多くもたれているが、具体的に「どんな目標に対して、どんな活動を行うのか」「そのために、どのような活動の場を構成するのか」といったことについてのコンセンサスはまだ得られていない。

私の勤務する大阪教育大学教育学部附属平野小学校では、子どもたちが自分の生活を見直しながら真に自己を発揮し、自らの手によって文化を創造していくことが重要であると考え、1988年より『子どもたち自らの手による文化の創造』というテーマで実践的な研究を進めてきた。<sup>(1)</sup> 本小論では、1990年より本校において行った生活科実践研究をもとに、生活科学習の中核となる「主体的な活動の場」と「活動の交流の場」について、その構成方法を明らかにしたい。

## I 生活科と「子ども文化」

### 1 生活科の特性

#### (1) 観察者から生活者へ

校庭で遊んでいる子どもが、偶然生き物を見つけ、教室に持ち帰って飼いはじめることがよくある。これまでの低学年の理科の学習では、生き物を捕まえ、飼うなかで生き物の形態や生活のしかたについて、客観的に調べていく活動を大切にしていた。つまり、子どもたちの生き物に対する見方・考え方を育て、観察者としての目を養っていくことに重点をおいていた。

さて、生活科が始まった教室にも、これまでと同じようにカミキリムシ・スズムシ・メダカ・キンギョなどさまざまな生き物を入れた虫かごや水槽が並んでいる。しかし、そこで話題になるのは、キンギョやスズムシの生態ではなく、えさやすみかといった育て方、

つまり、いっしょに生活している者としての生き物へのかかわり方なのである。

#### (2) 知ることから親しむことへ

これは、自然にかかわる内容だけではなく、社会にかかわる内容にもいえる。例えば、低学年社会科「郵便の仕事をする人々」では、これまで郵便局のしくみや工夫を知るために、郵便局の見学をしたり郵便ごっこをしたりしてきた。しかし生活科では、手紙で必要なことを伝えるとともに、人々と適切に対応できるようにするために、手紙づくりを行い、実際に郵便局に出しに行く活動を大切にしている。そして、郵便局で働いている人に値段や出し方を聞いたりして、手紙や郵便局に親しみがもてるようにしている。

このように生活科では、「観察者の育成から生活者の育成へ」「知ることから親しむことへ」と重点が移ってきたといえる。<sup>(2)(3)</sup>

## 2 「子ども文化」の創造

子どもたちは、日頃から自分たちの生活を楽しめるのにするために、いろいろ工夫して遊んでいる。しかし、生活科における体験が契機となって、一層自分たちの遊びを工夫して、楽しい遊びを創りだしていくことができる。

2年「雨の日を楽しもう」の単元では、教室で楽しく遊ぶことができるおもちゃを作ることになった。いろいろな遊び道具の発想や具体的な計画を交流しながら、自分の作りたいものを、自分の作り方で作っていった。そして、すごろく・パチンコ・シルバニアファミリーの家・サーキットなど、様々なおもちゃを完成させ、雨の日には楽しく遊ぶことができた。

このように本校では、子どもたちが自分たちの生活を見直しながら、自分の生活をよりよくするために、「何を」「どのようにして」ということを、子どもが主体的に決定し、実行していくことが大切であると考えている。そして、一人ひとりがいきる主体者として環境に積極的に働きかけ、創りだされた子どもの考え方・感じ方・行動のしかたを、『子ども文化』ととら

えてきた。<sup>44)</sup>

## II 「子ども文化」を創りだす活動<sup>45)</sup>

### 1 主体的な活動の場の構成

子どもが主体的に活動を展開していくためには、「何を」「どのようにして」といった活動の内容や方法を、一人ひとりが自分の思いに向けて自由に工夫できることが必要である。教師に言われた通りにしている活動ではなく、試行錯誤を繰り返しつつも、自分の考えで活動を進めていってこそ、主体的な活動といえるのである。

#### (1) 主体的な活動に向けての読み取り

子どもの主体的な活動を保障するためには、子どもの実態をとらえておく必要がある。なぜなら、子どもの実態をとらえることなしには、子どもの活動への適切な援助ができないからである。

##### ① 子どもができることの読み取り

「さあ、自由にやりなさい」と言われ、すぐに活動を始め、やり通せる子どもは少ない。低学年の子どもにとって、一人でできることには限界がある。まず活動させてみることは大切であるが、能力的に不可能なことをしては、危険がともなったり、活動が停滞したりしてしまう。

そこで、子どもができそうなことをとらえておくのである。例えば、それまでの子どもの生活経験や学習経験を、紹介カードによって読み取り、直接子どもから聞き取っておくと、次の活動構成に役立てることができる。

##### ② 子どもがしたいことの読み取り

子どもが主体的に活動を始めるためには、その活動に対する興味・関心は不可欠である。「おもしろそうだ」「やってみたい」といった思いが、主体的に活動を推進していくのである。それだけに、「子どものしたいことは何か」という意欲の方向をとらえておく必要がある。

「何を」「どのようにして」やりたいのかを表した計画カードを活用すると、子どもの興味・関心の有無や意欲の方向をとらえるのに有効である。

#### (2) 主体的な活動への援助

このような子どもの実態把握にたって、子どもの主体的な活動を援助したいものである。一人ひとりの子どもの主体的な活動に対して、次の5つの観点から援助の内容を考えておくと、適切な援助を果たすことができる。

a. 「物」の援助…「～をしたい」「～でしたい」といった子どもの欲求に応えるだけの「物」について、その量や種類を想定し、できる範囲で準備しておく。

b. 「心情」への援助…子どもが活動につまずいたり、意欲や自信をなくしてしまったりした時に、必要に応じて認めたり励ましたりする。

c. 「技能」の援助…製作のしかた、植物や動物の植え方・飼い方のこつなど、子どもにとって困難だが活動上どうしても必要な技能について指導する。

d. 「空間」の援助…集会室・体育館・運動場・プールなど、教室以外の場所も、子どもの必要に応じて可能な限り保障する。

e. 「時間」の援助…週に3回の生活科というのではなく、活動内容によっては、3時間通しの週1回の生活科というように、時間を柔軟に運用する。

このような援助を図るときには、次のような配慮が必要である。

- 子どもの活動に応じて行う。
- 援助のタイミングに十分配慮する。
- 援助のしかたを工夫する。

### 2 活動の交流の場の構成

「子ども文化」を創造していくためには、一人ひとりの子どもの活動を大切にするだけでなく、子ども集団の中で、ものの見方や考え方、感じ方を交流することが大切である。なぜなら、友だちとの交流を図ることによって、友だちの多様な活動や活動に対する思いを知り、自分にとっての「よりよい生活のしかた」を見つけることができ、「子ども文化」が創造されていくからである。

#### (1) 活動の交流への読み取り

##### ① 活動の進捗の読み取り

学級全体で交流の場をもつためには、どの子どももある程度活動の進展があり、自分の活動を発表したり、友だちに興味をもって発表を聞けたりできるようになっている必要がある。そこで、交流の時期をみきわめるために、子どもの活動の進捗を読み取っておく。

##### ② 交流内容の読み取り

子どもは、それぞれの活動をすすめていく過程で様々な工夫をし、失敗や成功を繰り返している。そんな中で、他の子どもに認めてほしいことがあるのか、困っていることがあるのかなど、交流すべき内容を読み取っておく。

#### (2) 活動の交流への援助

このような観点からの読み取りを基にすると、価値ある交流の場を構成することができる。現在は次のような方法によって、活動の交流の活性化を図っている。

a. ツアー方式…制作場所へ行って友だちの作品を見て、自分たちの活動内容やその時の思いを交流する。

b. 展覧会方式…作品とその紹介文を掲示しておき、

互いにそれらを見て回り、作品のデザインや作品に対する思いを交流する。

- c. 生活マップ構成方式…学校探検や町探検などの活動において、気づいたことや思ったことを、生活マップ（学校や町の概要をえがいた地図）に位置づけていくことによって交流する。
- d. 心情プレート（カード）表示方式…活動場所や活動後の生活科カードに、「楽しい」「困っている」などといった気持ちを表示して、交流する。

このような援助を図るときには、次のような配慮が必要である。

- したことや思ったことを関連づける。
- 楽しく、活動的な交流の場を工夫する。
- 新たな意欲や発展的な活動を意識づける。

### Ⅲ 2年「秋を楽しもう」の実践<sup>6)</sup>

#### 1 実践にあたって

学習指導要領には、2年生の学習内容について「季節や行事にかかわる活動を行い、四季の変化や地域の生活に関心をもち、また、季節や天候などによって生活の様子が変ることに気づき、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりすることができるようにする」と記述している。

本校の子どもたちは、住んでいる所が広範囲にわたり、共通した地域の行事が少ない。しかし校内で、縦割り班による全校遠足や附小祭りなどにおいて、オリエンテーリングを経験している。また、子どもたちは「プレハブ倉庫の横で、大きな実ができて木は何か知ってる？」というように、とっておきの秘密をクイズのように聞いてくることもある。そこで、秋の季節を感じ、自分たちの生活を楽しくするために、2年前から「クイズテーリング」を構想してきた。

これは、日頃の遊びや校庭探検の中で見つけた秋を題材にしてクイズを作り、校庭地図を見ながらこのクイズを解いて回っていくゲームである。幸い、校庭にはたくさんの木があり、昆虫も多い。このような比較的恵まれた環境の中で、「中央玄関の前にあり、赤い葉や白い実ができて木は何でしょう」といった秋を題材にしたクイズを作り、クイズテーリングをしていくことによって、楽しみながら秋の季節を味わうとともに、グループの協力といった社会性を育てることもできると考えた。また、クイズテーリングに使った校庭地図をもとに、秋の自然に関わるだけでなく、社会や自分の生活に関わる事柄を「環境地図」にかきこみ、自分を取り巻く秋を総合的にとらえることを期待した。このように、主体的に身の回りの秋の変化に気づき、力を合わせて工夫しながらクイズテー

リングをしたり、環境地図を作ったりしている姿を本単元における「子ども文化」創造の姿ととらえている。

#### 2 実践の概要

##### (1) 単元の目標

- 秋を題材にしたクイズテーリングや身の回りの秋を表わす環境地図を、主体的に作る。
- 友だちと力を合わせて、クイズテーリングを楽しんだり環境地図を作ったりする。
- 身の回りの自然・社会・生活などの変化から秋の特徴に気づき、秋を楽しむ。

##### (2) 活動構成の仮設

- a. 日頃の遊びや校庭探検などで見つけた秋をクイズにすることによって、秋を題材にしたクイズテーリングへの意欲を高めることができる。

本単元では、秋の特徴に気づき、秋と楽しくかかわっていくことを期待して、秋を題材にしたクイズテーリングを行った。そこで、子どもの日頃の遊びや校庭探検などで見つけた秋をクイズにすることによって、「こんな問題もできるぞ」「校庭へ確かめに行きたい」というように、クイズテーリングへの意欲を高めることができると考えた。

- b. クイズテーリングの際、困ったことを話し合い、その対策について考える場を設定することによって、2回目のクイズテーリングを楽しめるものに工夫できる。

クイズテーリングについて、自分たちの活動を振り返り、困ったことを話し合い、その改善策を考えるようにした。これは、この交流の場において、子どもたちはクイズの不備な点やオリエンテーリングの仕方での注意すべき点を意識することができ、2回目のクイズテーリングをさらに楽しいものに工夫できると考えたからである。

##### (3) 学習の流れ（全13時間）

表1参照

#### 3 結果と考察

##### (1) 活動構成の仮設aについて

- 日頃の遊びや校庭探検などによって見つけた秋をクイズにすることによって、秋を題材にしたクイズテーリングへの意欲を高めることができる。

校庭探検を通して、子どもたちが見つけたことは、次の通である。（全37人）

- ◎ 秋の自然に関するもの…33人
  - 植物に関するもの（29人）
  - 動物に関するもの（4人）
- ◎ 社会・生活に関するもの…4人
  - ・プールの水の色が変わっていた。
  - ・焼いもをした後は、炭ができていた。

表1 学習の流れ (全13時間)

「子ども文化」創造の過程と子どもの意識	教師の役割				
<p>* 秋を見つけて遊んでいる。            ・秋の花や、木の身を集めて遊んでいる。            ・コオロギやスズムシを探してつかまえている。</p>	<p>◎ 学級全体へのはたらきかけ            ○ 一人ひとりの読み取りと活動への援助</p>				
<p>〈秋を見つけよう〉            ○ 日頃の遊びや校庭探検などで見つけた秋を、「見つけたよカード」に記録し、話し合う。 ② (随時)</p>	<p>◎ 日常生活や学校探検において見つけた秋を、「見つけたよカード」に記録したり掲示したりできるようにしておく。</p>				
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 33%;">コオロギの 鳴き声が聞こえるよ。</td> <td style="width: 33%;">イチョウやボ ラの葉が、色 づいているよ。</td> <td style="width: 33%;">吹いてくる 風が、秋らし く感じるよ。</td> </tr> </table>	コオロギの 鳴き声が聞こえるよ。	イチョウやボ ラの葉が、色 づいているよ。	吹いてくる 風が、秋らし く感じるよ。	<p>◎ 身の回りの秋の様子を話し合わせるために、いくつかの秋が見つかったら、「見つけたよカード」の内容をクイズ形式にしてとりあげる。</p>	
コオロギの 鳴き声が聞こえるよ。	イチョウやボ ラの葉が、色 づいているよ。	吹いてくる 風が、秋らし く感じるよ。			
<p>○ 「見つけたよカード」をもとに、クイズにして身の回りの様子について話し合い、確かめに行く。 ②</p>	<p>(活動構成の仮説 a)</p>				
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;">附小広っぱで、黒い炭が できているのは、何のあと でしょう。</td> <td style="width: 50%;">青く澄んだ水が、緑色 に変わっている所はどこ でしょう。</td> </tr> <tr> <td>秋に焼きいもをしたあと に、黒い炭が残っているん だな。あの時は、楽しかっ たな。</td> <td>いつのまにプールの水 の色が変わっていたのか な。クイズにするとおも しろいね。</td> </tr> </table>	附小広っぱで、黒い炭が できているのは、何のあと でしょう。	青く澄んだ水が、緑色 に変わっている所はどこ でしょう。	秋に焼きいもをしたあと に、黒い炭が残っているん だな。あの時は、楽しかっ たな。	いつのまにプールの水 の色が変わっていたのか な。クイズにするとおも しろいね。	<p>○ 秋を見つけにくい子や自然にばかり目がいく子には、社会や生活の変化にも目を向けた「見つけたよカード」をとりあげ、観点を広げるようにする。</p>
附小広っぱで、黒い炭が できているのは、何のあと でしょう。	青く澄んだ水が、緑色 に変わっている所はどこ でしょう。				
秋に焼きいもをしたあと に、黒い炭が残っているん だな。あの時は、楽しかっ たな。	いつのまにプールの水 の色が変わっていたのか な。クイズにするとおも しろいね。				
<p>〈クイズテーリングをしよう〉            ○ 秋を題材にしたクイズをグループごとに考え、クイズテーリングの準備をする。 ②</p>	<p>◎ クイズ作りと確かめ活動の経験をもとに、クイズテーリングの方法を計画カードに書かせることによってクイズテーリングのイメージを具体化する。</p>				
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 33%;">秋になって 変わった動物 はいないかな。</td> <td style="width: 33%;">実ができて いる木を探し てみよう。</td> <td style="width: 33%;">枯れ葉がたく さん落ちて、掃 除が大変だ。</td> </tr> </table>	秋になって 変わった動物 はいないかな。	実ができて いる木を探し てみよう。	枯れ葉がたく さん落ちて、掃 除が大変だ。	<p>◎ 活動中の子どもの姿を読み取り、困っているとの対応を考えさせるための話し合いの場を設定する。</p>	
秋になって 変わった動物 はいないかな。	実ができて いる木を探し てみよう。	枯れ葉がたく さん落ちて、掃 除が大変だ。			
<p>○ グループごとに、クイズや校庭地図を交換し合って、クイズテーリングⅠ・Ⅱをする。 ④</p>	<p>(活動構成の仮説 b)</p>				
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 33%;">落ち葉にく るまって、木 にぶら下がっ ている虫は？</td> <td style="width: 33%;">朝会台の後 ろの木にでき ている実は、 何でしょう？</td> <td style="width: 33%;">運動場の掃除 で、今一番困っ ていることは何 でしょう？</td> </tr> </table>	落ち葉にく るまって、木 にぶら下がっ ている虫は？	朝会台の後 ろの木にでき ている実は、 何でしょう？	運動場の掃除 で、今一番困っ ていることは何 でしょう？	<p>○ 協力しながら意欲的に活動を進めているグループは大いに認め、励ますようにする。</p>	
落ち葉にく るまって、木 にぶら下がっ ている虫は？	朝会台の後 ろの木にでき ている実は、 何でしょう？	運動場の掃除 で、今一番困っ ていることは何 でしょう？			
<p>〈秋の環境地図にまとめよう〉            ○ これまでの活動で見つけた秋の様子を環境地図に位置づけて、秋の環境地図を作る。 ③</p>	<p>◎ 校庭地図をもとに、環境地図の作り方を話し合う中で、自然・社会・生活といった観点を明確にする。</p>				
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 33%;">校庭地図が 秋で一杯だ。地 図にまとめよう。</td> <td style="width: 33%;">教室の生き 物のこともか こう。</td> <td style="width: 33%;">校庭で遊んで いる私たちもか いておこう。</td> </tr> </table>	校庭地図が 秋で一杯だ。地 図にまとめよう。	教室の生き 物のこともか こう。	校庭で遊んで いる私たちもか いておこう。	<p>○ 書く内容がつかみにくい子どもには、クイズテーリングの中で心に残った問題をとりあげるよう助言する。</p>	
校庭地図が 秋で一杯だ。地 図にまとめよう。	教室の生き 物のこともか こう。	校庭で遊んで いる私たちもか いておこう。			
<p>* 秋になると、いろいろな変化があるな。            * クイズテーリングは、楽しく秋探しができるね。            * 環境地図にまとめると、秋の学校の様子がよくわかるよ。            冬の環境地図も作ってみたいな。</p>	<p>◎ 展覧会方式で、秋の環境地図を交流し、互いのよさを認めあえるようにし、冬の環境地図作りへの意欲を高めるようにする。</p>				

このような見つけた秋の様子について簡単に話し合った後、「プールの水の色」（夏にプール水泳を楽しんだ透明な水が、濃い緑色に変わっている）と「焼きものの後の炭」をクイズにして、子どもたちに提示した。この2問については、先の話し合いでは出てこなかったので、発見者以外の子どもたちは、非常に興味をもち、クイズを解くことを楽しむと同時に、自分もクイズを作りたいという声が上がってきた。そこで、クイズの答え合わせと自分のクイズ作りのために、再度校庭探検に出かけた。

その結果、子どもたちが作ったクイズの数と内容は、表2、3の通りである。

表2 クイズの数(全38人)

クイズ数	人数	クイズ数	人数
7題	5人	3題	5人
6	0	2	14
5	0	1	9
4	5	0	0

表3 クイズの内容(全38人)

クイズの内容		クイズ数
自然	(植物) カエデ、ナノキソハゼ など	78題
	(動物) スズムシ、チョウ、クニシ など	16
	(その他) 風	1
社会	プール、池、大学の校舎など	10
生活	服装、焼きいものあと	2

2題以上のクイズを作っている子どもが29人おり、そのうち7題も作っている子が5人いた。このことから、多くの子どもが意欲的にクイズ作りに取り組んでいることがわかる。

しかし、1題しか作れなかった子が9人いた。これは、「何をクイズにしようかな」というように、クイズの対象を決めかねて時間をとってしまったためである。このような子どもをもう少し早く見つけ、「一番おもしろいと思ったものは、どんなこと?」と、対象を意識することばがけができればよかったと考えている。また、「夏にはたくさんいたけど、秋になると死ぬものはなあに?」というように、答えを特定できなかったり、秋に直接関係しないクイズを作っている子どももいて、クイズの内容を吟味する必要があった。

(2) 活動構成の仮設bについて

クイズテーリングの際、こまったことを話し合い、その対策について考える場を設定することによって、2回目のクイズテーリングを楽しいものに工夫することができる。

- ・クイズの答えが特定できるか?
- ・秋に関係のあるクイズになっているか?

このような観点から、作ったクイズをグループで吟味しあい、クイズテーリングIのクイズを修正させた。教師の目からは、まだまだ不十分なクイズが多かったが、実際にやってみて自分たち自身で気づいていくことが大切であると考え、新たな修正の指示はださなかった。クイズテーリングI終了後の子どもたちの感想は、次の通りであった。(全38人)

- うまくできた。(満足感) .....7人
- よかったこともあるし、よくなかったこともあった。.....21人
- うまくいかなかった。(不満足感) .....10人

## クイズテーリング

2組(4)はん( )  
(2)はんのクイズで、

☆ よかったことは、

かんたんなものだいいが  
あってよかったです。

☆ こまったことは、

〇〇くんの答えがぜんぜん  
わからなくて秋らしくな  
かった。

☆ なおしてほしいことは、

〇〇くんの答えやもんだいが  
秋らしくないのでなおして  
ほしいです。

図1 グループからの手紙

不満足感をもった子が10人いたが、問題が不適切なために意味がわからなかったり、答えが特定できなかったりしたための不満足感が8人であった。そこで、図1のような「グループからの手紙を交換しあい、自分のクイズの問題文を修正するようにした。またこの他にも、次のような不満を書いている子もいた。

- ・問題文の字がうすかったり、きたなかったりして、読みにくかった。
- ・秋に関係のないクイズがあった。
- ・勝手に先に行く子がいて、困った。

そこで、子どもたちと話し合い、クイズやクイズテレーリングの仕方を改善するようにした。

- ・字をていねいに書いて、わかりやすくする。
- ・秋に関係のあるものから出題する。
- ・場所、大きさ、形、色などの説明や、部分の語のヒントを書いて、わかりやすくする。
- ・グループで協力する。

クイズテレーリングⅡ終了後の子どもたちの感想は、次の通りである。(全37人)

- うまくできた。(満足感) ……………25人
- うまくいかなかった。(不満足感) ……4人
- したことの実事のみ記述 ……………8人

満足感をもった子どもは、7人から25人に増えていた。この事から、クイズテレーリングⅠ終了後の困ったことやその対策についての話し合いは、有効だったといえる。子どもたちの満足の理由は、次の通りである。(複数の理由がある)

- クイズの問題が解けた。……………16人
- グループで協力できた。……………4人
- クイズテレーリングの活動がおもしろかった。(証拠をとってきたことなど) ……………7人

一方、明確な不満足感をもっている子が、4人いた。学級全体の子どもがもった不満をまとめると、次のようになる。(複数の理由がある)

- グループの協力ができなかった……………2人
- 他グループの子にからかわれた。……………2人
- 問題文やヒントが不適當だった。……………2人

クイズテレーリングⅠに比べると随分減ったが、クイズの問題にまだ不備があったのは残念だった。また、2年生の子どもにとって、協力ということは非常にむずかしいものであり、大切なものであるということあらためて感じた。グループの協力について、もう少し適切に対応する必要があったと考えている。

#### 4 実践を終えて

本実践では、子どもが「活動への意欲を高める場」と、「活動を工夫する場」の構成方法を検討した結果、次のようなことが明らかになった。

- 見つけた事実をクイズにすることによって、探検したり事実を交流したり(クイズテレーリング)する意欲を高めることができる。
- クイズテレーリングⅠの後、困ったことやその対策を話し合い(活動を交流する)場を設定すると、活動Ⅱにおけるトラブルの数を減らすことができる。

しかし、全ての子どもが自分の活動に対して満足感をもち、つまでに高めるには、さらに子どものつまずきを把握し、適切に対応する必要がある。特に本実践では、

「クイズの妥当性」と「グループの協力」が重要なポイントであった。これからは、このような活動に応じた子どもの実態把握のポイントを明らかにしながら、適切に援助していけるよう工夫していきたい。

#### おわりに

子どもの実態に応じた援助のあり方を明らかにしようと考え、子どもの読み取りと援助を関連づけながらその方法を探ってきた。子どもたち全体に関わる観点が明らかになってきたので、これからは、さらに一人ひとりの子どもを大切にしたい読み取りや援助の仕方を探っていきたい。

また、今一度年間指導計画を見直し、単元の内容や位置づけ、学習環境を改善していく必要もあると考えている。

#### 【注及び引用文献】

- (1) 大阪教育大学教育学部附属平野小学校『子どもが創りだす学習』東洋館出版社 1989 pp.109～130
- (2) 大阪教育大学教育学部附属平野小学校『学習の個性化における教師の役割』東洋館出版社 1992 pp.110～111
- (3) 松本勝信氏は、低学年理科や社会科と生活科との違いについて、「従来のそれらは学習対象となる自然事象や社会事象に働きかけて、その特徴をとらえることが学習の終わりであったのに対して、生活科では、それらの特徴をとらえることはまだ学習活動の途中のことであり、その特徴をとらえて終わりではなく、そのとらえた特徴を基に自分の活動の仕方を変えることが求められている」と述べている。(松本勝信「生活科実施へのアプローチ—“試し”を解き放つ体験を—『大阪新潮』No.131 大阪府公立小学校教育研究会 1991 p.8)
- (4) 蛭谷米司、益地勝志『生活科の理論と実践』初教出版 1988 pp.8～66
- (5) 拙稿「“子ども文化”創造へのよみとりと支援」『大阪教育大学紀要第V部門 第41巻 第1号』大阪教育大学 1992 pp.133～143
- (6) 大阪教育大学教育学部附属平野小学校『平成4年度研究のまとめ』1993 pp.57～60